

海外研修で得たもの

福島県立医科大学附属病院 初期研修医（2年目） 仲江川 雄太

学生のころより耳鼻科に入局を決めており、耳鼻科研修中であった私の所に、大森教授からシンガポールの研修に参加してきたらどうか、との話をいただきました。海外研修の存在は知ってはいましたが、その前後に友人の結婚式や喉頭科学会への参加など何かと忙しく、海外研修も約1週間と長期であるため、参加することは難しいと思っていましたが、せっかく応募するチャンスがあるならば海外の医療に触れてくるといい、とのお言葉をいただき、参加させていただくことにしました。

参加を決めたものの英語に全くの自信はなく、シンガポールにいったら大丈夫だろうか、毎日のように考えていました。不安を覚えつつ、英語を再度勉強するわけでもなく、旅行ガイドだけ眺めていました。

研修では英語での自己紹介、症例などのプレゼンテーションがありましたが、耳鼻科から後期研修4年目と1年目の先生方と3人で1つのプレゼンであったので、先輩方の肩にぶら下がり発表の準備をさせていただきました。

いよいよ出発の3月7日、午前の便を利用し成田からシンガポールへ。到着してまずその暑さにびっくりしました。ただ立っているだけで自然に汗が流れ落ちてきます。もう少し暑くないだろうと油断していました。冬から真夏に来てしまいました。

タクシーを利用しホテルまで移動。タクシーからの景色はまるっきりの異国。道路沿いの南国の植物が私たちを出迎えてくれます。出発時は不安で一杯だったのですが、その景色をみて少しずつ期待感の方が大きくなるのを感じました。

翌日からの研修は、非常に刺激的な毎日でした。今まで英語などろくに話したことがなかったのに、毎日耳から入る情報は英語です。外国に来て、実際に英語を話し、聞くことがどんなに大変で、またおもしろいかを知りました。病院見学は耳鼻科領域を中心に見学させていただきましたが、自分にも分かる単語が多く、また聞いてみたかった、日本とシンガポールの共通点や違いなどを自分で話し、伝わった時の嬉しさはすばらしいものでした。



【先生達と discussion】

今回海外研修に参加させて頂き、多くのことを学びました。

・ シンガポールの医療事情

忙しさにかまけて予習をしていませんでしたが、日本のそれとはシステムが全く違い驚きました。日本では自分が希望する科に誰でも進むことができますが、シンガポールでは科ごとに人数制限があり、成績の良いものから希望の科に行くそうです。そもそもシンガポールは小学生 4 年生の時に全員を対象とした試験があり、その結果でクラスや教育方針を変えるのだそうです。非常にシビアな国だと思うと同時に医学部に進学するのは国のトップレベルの人たちで皆非常に優秀なのです。医学部自体の数も少なくシンガポールで医師になることの大変さが伺われます。

・ 英語の必要性

大学 2 年の英語の講義が終わって以降、英語とは無縁の生活をしていました。最近になり英語の論文を読まなければいけないような状況になり、改めて英語力のなさを実感していた矢先の海外研修。毎日が自分の不勉強さを悔やむ日々でした。全く聞き取れないわけではないのですが、質問に対する答えを自分の語彙力では出せず、自分からの質問もうまくニュアンスを伝えられず、歯がゆい思いをしました。もっと聞きたいことがあるのに、もっと伝えたいことがあるのに、と思う毎日。改めて英語の必要性を認識しました。

文章力が稚拙であるので伝えたいことの半分も文章に出来ていない気がしますが、一緒に参加したみんなの文章を読んでいただければ、伝わるかなと、思います。そして実際に参加して自分の体で体感することが 1 番分かっていただけ

と思います。

病院研修意外にも、観光するお時間もいただきしっかりとマーライオンを拝んできました。古い中華街の町並みと高層ビル群。シンガポールはものすごいスピードで発展している国であることを実感でき、活気に満ち溢れた国でした。



【開発著しいベイフロント】

最後に一緒に参加できた耳鼻科先輩方、研修医のみなさん、指導・引率していただいた葛西先生、石川先生、大谷先生、Nollet先生ありがとうございました。この場をかりて御礼申し上げます。



【SGH先生方とともに】